

消えゆく幻燈

竹中 郁

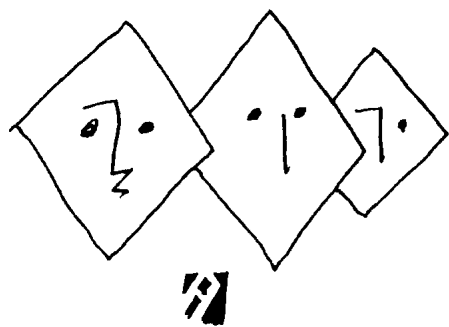


Zakemaka

Nov. 77

消えゆく幻燈

竹中郁



ノア叢書 5

消えゆく幻燈

一九八五年三月七日発行

著 者 竹中 郁

編集者 足立 卷一

発行者 瀬沢 純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市大淀区豊崎五―二―一三 大淀ビル

電話〇六(三七三)三六四一

振替大阪四―三〇六四五七

印刷・大原印刷 製本・小幡製本所

0095-8505-7641

定価二八〇〇円

ノア叢書は随筆の叢書です。

消えゆく幻燈・目次

I 消えゆく幻燈

堀 辰雄 10

古い記憶新しい記憶 二三片 エソヤンホテル 神戸から

稲垣足穂 25

贗サイゴオ

春山行夫 28

春山行夫君と私と

近藤 東 31

《抒情詩娘》にかこまれたドン・ファン

三好達治 33

三好達治 三好達治についてのとつおいつ

丸山 薫 60

人と作品 1 人と作品 2

*

北原白秋 87

筑後柳河

室生犀星 98

新編『抒情小曲集』

阪本越郎 101

暮春詩集のすがた

サトウ・ハチロー

短編

104

長谷川素逝 107

すれちがい

吉田健一 111

あざやかな人

*

坂本 遼 115

長い間

井上 靖 119

井上靖の人と作品 「きりん」のころ 詩の塔

山村 順 134

『おそはる』の作者に 五十年来

井上多喜三郎 137

老蘇の風呂

杉山平一 140

『背高クラブ』評

上井正三 143

詩集序

足立巻一 145

「火の玉丸」「足立丸」 『やちまた』

*

関西詩人風土記 153

京阪神の文学遺跡 161

意見と経験 169

消えゆく幻燈 175

蜷川虎三Ⅱ気さくな知事 マン・レイⅡ「ひとで」の作者
坂本遼Ⅱたんぼの詩人 イリヤ・エレンブルグⅡ「雪解
け」の人 鍋井克之Ⅱ風流座文士劇 稲垣足穂Ⅱ「星を売
る店」の人

Ⅱ 親愛な画家たち

小磯良平 188

人と作品 伝習と好尚 きょうは不在

鍋井克之 228

半架空会見記 鍋井さんの思い出

藤島武二 245

オペリスク

古家 新 265

小豆島のアトリエ ながい間

伊谷賢蔵 270

京都植物園前

伊藤継郎 274

芦屋川西岸

熊谷守一 280

モリカズ

中西利雄 282

長の年月

瀬崎晴夫 285

漂泊の画家の死

流 政之 288

ジョルジュ・スーラの香水

ルオー、この一徹 313

文五郎の手、ロダンの手

317

291

Ⅲ 短編五つ

芝居行 334

見舞 338

雲のゆきき 347

恥 358

牛肉と鯛 374

*

年譜 385

解説 440

カバ
ー・
扉装
画
竹中
郁

I

消えゆく
幻燈

堀 辰雄

古い記憶 新しい記憶

ここ暫く詩が書けなかったから、「四季」の方は休ませていただくと申し送ったら、折返し熱心な編集部の方から、散文を身代りにと頼まれたので、それなら折も折、少々書きたいこともあるしと久方ぶりに万年ペンをとった。

詩人の自身が久方ぶりにペンをとるなどと書くとは可笑しいが実はこの頃、もの書く時と云えばザラ紙に4Bの鉛筆という運命が、私の生活の半分を犯すようになってきたものだからである。ザラ紙に大きな文字で書きとばすのは速くもあるし大まかな書きぶりは出来るが、きめの細かい陰影に富んだ文章は出来ぬような気がする。「画論」の三月号に鏑木清方氏が、用紙の関係から

近頃ペンを毛筆に代えたところが、大変氣持よい文字が書けるような氣がすると、暗に今まで用いられたペンの不備をかこつていられた。鉛筆よりはペン、ペンよりは毛筆、つまり速度の遅ければ遅いほど文章がこくをもつわけと云うのであろう。清方氏のような芸道を数十年も踏み越えて來られた人の言葉にそつはあるまいから、これはどなたにも承認される事實であらう。

さて、私は実はこの場所をかりて、堀辰雄君との交友をしるしたいのが念願であつた。

堀君と初めて会つたのは、昭和二年七月十日、東京田端なる芥川さんのお宅に於てであつた。なぜそんなにその日まで判然と記憶しているかと云うとその二週間のちの二十四日にはそのあるじの芥川さんが自決されて、その報せを新聞でみた私は激しく驚いた挙句、二三日は芥川さんのつい先日間近に見た「手のふるえ」や「首筋のいたいたしさ」が眼についてはなれなかつた。そんなことでよくその日を記憶しているのである。

その日はどんよりと曇つて、むし暑かつた。澄江堂の二階はあけ放たれてあつたが、はじめて訪問した年若いものには、その暑さと芥川さんの前にいると云う意識とで軀がつかつた。しかし、あるじの芥川さんはこちらが尋ねることに飽かず返事をして下すつたし、その上、御自分からどしどし話題をひろげてともすれば堅くなっている若い者をくつろがそうと骨折つて下さるのがありありと読めた。私が明治大正時代の詩集を蒐めているのを話すと、御自分で階下の書庫へ下りて行かれて「あげよう」と云つて二三冊を私の前へ差出された。私は一応は辞退したけれ

ど、実は芥川さんの手沢本をいただく光栄にわくわくして、その喜びの色を覆えなかった。「湖南の扇」も署名していただいた。実にうれしかった。

その場へ、堀辰雄君が来合わせて、芥川さんに紹介された。堀君は紺の着物をきて、太い縁の眼鏡をかけていた。色の白い顔に少し鼻の下に無精ひげを生やしていた。堀君はそれまで屢々芥川さんや室生さんの随筆に出てくると、当時あった冊志「驢馬」へ出した詩や散文やらで私の方はよく知っていたのである。おそらくこの日のことを堀君は覚えてはいはしませんが、私は地方のものが東京の人や仕事やらを何でもかでも知ろうとする田舎者の癖として、この芥川さんの宅での偶然の邂逅ですら未だに記憶しているわけ。その時、堀君とは二三友人の噂をし合っただけで別れたがその物腰恰好から、その芥川さんからの愛され方から私には好個の青年詩人として印象ふかく忘れられなかった。

私がしばらくヨーロッパで遊んでいる間に、堀君は「不器用な天使」その他一二篇の短篇をかいて、小説家として出発していた。改造社から五十銭でたくさん新進の小説家のものが出た。その一冊に堀君のも混っていた。昭和五年か六年かの頃である。

堀君の本好きは芥川さんの随筆にも表れているが、堀君のたくさんさんの著書を見ると、その深い趣味がよくわかる。私の詩集『象牙海岸』が第一書房から出た時、その特別製の見本刷を見てあれこれと注意を与えてくれた。その注意が書房へ通じぬうちに製本が出来あがって、大変残念な

ことをした。あの時もっと余裕があつて堀君の意見のままになっていたら、よい思い出にもなつたであらうに。

堀君は江川書房から次々美しい本を出してゆくので、私も薄い詩集を出してほしいと堀君を通じて申込んだことがあつた。

その用意をしている中に江川書房の主人が病気で出版を中止してしまつたので、これ又残念なことをした。若し出るのだったら私は堀君に装釘一切をたのむつもりであつた。

私にあちこちの冊志さっしに書かせたり、又散文をかくことを暗々のうちにすすめたりしたのも堀君であつた。いつでも発表場所を世話するよと云うのがその好意の一斑であつた。はじめて小説らしい小説「見舞」というのを書いて送ると、早速「君もなかなかやるね、新しい鷗外だ」という批評を呉れた。私も勝手の分らぬ小説をかいて当惑気味だったので、その批評をきいて大いに安心した。それが冊志「行動」にのつて、新聞の月評で谷崎精二氏と舟橋聖一氏とに過賞にあずかつたのは今でも忘れられない。

堀君の「旅の絵」という短篇の中の人物は実は私がモデルである。丁度今から十年前の若い日の私が、あの篇中で生きている。象の皮のような外套を着てベレ帽をかむつて、そして、ホテルで下手な英語で交渉する。あの場景をよむと、その間の十ヶ年は忽然と消えうせて、堀君も私も

二十歳台の物好きな青年になってしまふ。あの頃は、何でもかでも面白くて仕様のない年頃であった。堀君を引っぱって明石の町に隠棲していたイナガキタルホを訪ねたりしたのもあの時だった。

病気がちな中にも次々と仕事を完成していく堀君をみると、どこにそのエネルギーがひそんでいるのか疑うが、私自身も六年前に同じ病気の大袈裟なをして以来、幾らかその秘密にふれたような気がした。秘密に触れはしたが、私はそのまま頭のエネルギーを文学的ならざる方向へ向けてしまったので何も書き物は残りはしなかった。

堀君は私が本好きなのを知って、屢々その著書を私の机辺へ届けてくれるのを忘れない。この一文をかく機縁も実は昨年の暮、大東亜戦争の勃発直前、奈良から神戸へ飄然とやってきて、今から倉敷の大原美術館へ絵をみに行く、君も行かないかと誘ってくれた。その時私は所用あって同行できなかったが、その帰るさ、堀君はグレコの「受胎告知」の絵にはなしが行ったついでに、あの複製写真のいいのを入手したいのだが、美術館に売っているのはとてもひどいものでお話にもならぬ、という話。私は幸い丁度、小磯良平君がああグレコを特に写させた原板があるからそれを焼増しさせよう、それなら相当調子のよく出たいい複製だから近いうちに届けさせると云って、神戸の三宮駅頭で別れた。その複製が出来て、堀君に私は希望条件を添えて届けたもの